右に同じ

ひょんなことから、日本から来ている業務視察のお客さんの接待をさせて戴いたことがある。朝から詰まっていた会議や表敬訪問を済ませ、お腹の具合もその発声音がピークに達して何とも言えない動物的な雄たけびが聞こえるようであった。微妙なバイブレーションによって腹の表面に波をうつ脂肪が目に浮かぶ位に達した時に、誰が言うでもなく、食事の話になった。

表面上は表情を変えなかったが、生唾が知らないうちに出てきた。条件反射である。

彼らの会社のアメリカ人スタッフのSさんも交えて、あれがいい、これがいいというごく普通の提案合戦の末に、コロラドステーキを食べることになった。ステーキの国アメリカでも、ぴんからきりまである肉の種類。Sさんの賛同もあり、私のかじった知識と経験から、幾つかのお店を

紹介してロケーション的な判断材料を渡した。感激の言葉が響くうちに、リーダー格の方が決断をなされた。

デンバーから30分ほど西に行った所にある、砦の形をしたレストランに行くことになった。ここはモリソンという町の中心地の南にあり、ロッキー山脈の東側の麓に位置している。1997年夏のデンバーサミットの時には、当時の日本の首相が、参加主要諸国の首相・大統領と夕食を共にしたところである。赤岩の林立する山肌が回りを囲むようにして、夕日に煽られるように燃え立っていた。レッドロックス公園のすぐ南にあることもあり、観光客も訪れている。

その砦作りの門をくぐってレストランに入ると、中庭にはたき火が用意され、ビール片手に話に花を咲かせている連中が何人かいた。思い思いの飲み物を楽しみながら、体一杯に感情を現して大笑いしていた。カウボーイハットの大男の背後を通り、受け付けに向かった。

テーブルにつき、談笑しながらメニューに目を通しはじめた私たちは、日本の伝統行事のように一瞬静まった。何を注文するか各々考えながらも、Sさんが気軽に話し掛けて笑っているウエイターに耳を傾けつつ、誰かが先に何を注文するか神経を過敏

にしている様子であった。彼らは更にリーダー格の年配者、Aさんにも神経を使っている様子であった。

Aさんが、簡単な挨拶を済ませたウエイターに顔を向けた。それと同時に他の人たちがAさんの顔を見た。いよいよ注文の儀式が始まったのである。メニューの最終確認をするかのようにアントレーに目を通してからAさんは注文をした。

飲み物からはじまり、前菜を決め、そしてアントレーへと進んだ。「私はこのプライムリブがいいんだが」と厳かに注文をなされたAさんの言葉が終わると、気持ち笑みを浮かべる方とメニューに目を戻す方、そして覚悟を決められたように思える方がいた。アメリカ人のSさんだけは何の変化も表情に見せずに自分の注文を待っている。

ウエイターが隣のお客さんに注文を聞いた。一息飲んだように見えた彼は、「じゃあ、僕もそれ。同じやつを」その後の人の注文は予想がついていた。「それでは私も同じものを」、「僕も」、「私もそれにしましょうか」、「Aさんがおっしゃるなら私も」、「おいしそうですね。私もそれ」。

よくもまあ統一されたと思われる注文内容であった。しかし、アメリカ人のSさんは、「私は、バッファローの肉と雉肉のコンビネーションを。それに、サラダを付けてくれますか。ドレッシングはサイド（サラダにかけずに容器に入れて横に置く）にして」。

日本人の慣習を残念ながら知っている私は、というよりもAさんがたまたま私の好物を選んでくれたので、他の人たちとは違った理由でプライムリブを注文した。焼き具合に関しては、私だけがレアであった。

こんな情景は日本では日常茶飯事にあることで、不思議なことではないが、個人主義のアメリカ人から見るとちゃんちゃら可笑しいようである。私のオートバイ仲間たちと食事をすると、特定のレストランに行かない限り大体皆違ったものを注文する。「自分で食べるんだから、好きなものを食べるのは当然だ」、「自分で金を出すんだから、

他と合わす必要がないだろう」といった気持ちが心の底にはしっかりと存在しているのである。

在米が長くなってしまった私には両サイドの言い分、というか文化的な背景や国民性の違いが分かる。二つの井戸を知っている人間にとって、食事を一緒にする相手に応じて対応を変えるのは面倒に思えるかもしれないが、「良し悪し」で判断せずに「違い」として理解すると案外気にならないものである。

「右に習え」を小さい頃から教えて協調を覚えさせられる日本人にとっては、アメリカ人から不思議がられる「右に同じ」現象も決して窮屈なものではないのかもしれないとふと思った。